

教会会報復刊第 38 号

特集／2024 年教会全体研修会

編集：愛宕町教会・総務部 発行者：宍戸俊介 発行所：甲府市北口 3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.atagomachi-kyoukai.org>

* みことば

「十字架の贖い、それがすべて」

聖書 ガラテヤの信徒への手紙 第 1 章 1～5 節

愛宕町教会協力教師 宍戸尚子

キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。
(ガラテヤ 1・4)

本当でしょうか？ 十字架の贖いがすべて。他にも大切なことがあるのではないのでしょうか？ ガラテヤの信徒への手紙でパウロはこの問いに答えています。

手紙は「パウロ、使徒」という言葉で始まっています。私パウロは使徒。その私から、ガラテヤの諸教会へ。使徒であることを強調しています。パウロは使徒ではない、と言う人たちがいたからです。使徒でないはずのパウロが伝える教えは間違っていると非難するのです。

パウロが伝道し、生み出されたガラテヤの諸教会に偽りの教師たちが入り込み、偽りの福音を伝え、それに惑わされて真の福音から偽りの福音へ、くら替えしようとする人々が現れました。それを察知したパウロは、どんなことがあってもそうさせてはならないと、この手紙を書きました。

このままにしておけない、使徒であることを疑われることは自分の説く福音も否定されてしまうことになる。断じてそうさせてはならない。そのような思いがあふれて、こう書き出します。「人々からでもなく、人を通してでもなく」イエス・キリストと父なる神によって「使徒とされた」パウロから。「人々からでもなく」、すなわち、誰かから推薦されたのでもなく、直接イエス・キリストの父なる神によって使徒の務めを与えられた。「人を通してでもない」、誰かの力を借りてやっているのではない。例えばエルサレムにはもっとえらい使徒がいる。その権威を借りて使徒の務めを果たしているのではない。そうではなく、私は直接「イエス・キリストによって」使徒とされた。確かに生前の主と一緒に暮らしたことはない。しかし主は復活され、その主が私と共にいてくださる。その主キリストによって使徒の務めを与えられている。「キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされた」とも言います(1節)。パウロに反対する人々は、復活の主を目撃したことがないパウロは真の使徒で

はないと言います。けれどもパウロは、私は復活のキリストに出会っている。ダマスコ途上で「なぜ、わたしを迫害するのか」「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」という声を聞いた。この時復活の主にお会いしている。「イエス・キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされた」という言葉で、パウロは偽りの教師たちからのいわれのない誹謗をくつがえしています。

そして神の栄光をほめたたえる言葉が続きます。「わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように」(3節)。そのキリストがどんな恵みを私たちに与えてくださったかが明らかにされます。「キリストは…御自身をわたしたちの罪のために献げてくださった」、それが恵みです。これ以外に恵みはありません。偽りの教師たちは言います。キリストは十字架にかかって私たちに贖ってくださった、その通りだ。しかし本当に救われるためには律法も守る必要がある。十字架の贖いだけではだめ、と主張します。

だから偽りの福音だとパウロは言います。十字架の贖い、それが私たちを救う。それ以外に何もない。それに何かを付け加えるので、何もかもだめになってしまう。「キリストは…御自身をわたしたちの罪のために献げてくださった」という恵みを伝えるために、私に使徒の務めをお与えになった。それは「人々からでもなく、人を通してでもない」、イエス・キリストと父である神から与えられたものである。ガラテヤの人たち、この福音に立ち返れ。十字架の贖いがすべて。パウロの思いが表されています。

これは、ガラテヤ教会の人たちだけでなく、私たちへのメッセージでもあります。ただ御子キリストの救いの御業を信じるだけで救われる。それがすべて。この喜びの福音を私たちも授かりました。すべての人が福音を伝えるために召されています。福音に生かされている人は、その喜びを伝えるために遣わされた人々、「使徒」です。「遣わされた者」は聖書の中にだけいるわけではありません。私たちも福音のために遣わされた者です。それぞれ与えられている場で、「十字架の贖い、それがすべて」と告白し、生活したいと願います。

* 2024年 教会全体研修会

3年連続教会全体研修会 1年目

主題「教会設立80周年とその先に向かって」

講演「記念すべき日」

《講師》 北 紀吉 教師(隠退教師)

2024年7月27日(土)1時30分~4時《講演・分団・全体会》

7月27日(土)午後、今年の研修会は、2027年5月に迎える「教会設立80周年」を視野に入れての3年連続研修会一年目として持たれました。主題は「教会設立80周年とその先に向かって」、講師には、2015年春までの19年間、愛宕町教会を牧してく

ださった北紀吉先生をお招きしました。

当日は感染症の第 11 波到来状況等のために、予定していた 5 名の方が欠席でしたが、講演には 30 名、分団協議には 23 名の兄弟姉妹が参加しました。2024 年教会全体研修会の記録を掲載いたします。

『いずみ』編集部

北紀吉先生を講師に迎えて

聖書

出エジプト記 12 章 1 節～20 節

(14 節)

この日は、あなたたちにとって記念すべき日となる。あなたたちは、この日を主の祭りとして祝い、代々にわたって守るべき不変の定めとして祝わねばならない。

讃美歌 讃美歌 21-59 番

【講演】

讃美歌 21 の 59 番を歌ったことがあるでしょうか。この 59 番は讃美歌 21 の特徴をよく表しています。54 年度版の讃美歌には「感謝」という言葉が少なく、探すのが難しいのですが、讃美歌 21 にはたくさん使われています。59 番は 4 節までずっと「感謝」です。それで今日は選んだのですが、讃美歌 21 が「感謝」という言葉を用いていることを覚えておくと、なお印象深いかと思います。

★

今日は、「教会設立 80 周年に向かって」の話をしてほしいということでした。「80 周年を記念する」ということですが、聖書がどういう時に「記念」という言葉を使っているか、その代表的な聖書箇所の一つが先ほどお読みいただいた聖書箇所です。この聖書箇所は、イスラエルにとって非常に重要な箇所です。出エジプトに当たって、「これこそ記念となる日であるから、このように記念しなさい」と、はっきり繰り返し書いてあります。そういう意味で、「記念する」ということがどういう意味を持っているのかを、まずこの御言葉から聴くのが良いと思います。

何を記念しているのか、それは出エジプトです。まさに神の救い御業を記念して、過越祭を守るのです。詳しくは語りませんが、過越を記念する祭りが過越祭です。それで分かりますように、神の御業を記念することが記念の中心にあることです。祭りも記念なのです。

神は、イスラエルの民を神の民としてくださいました。その神の民としての自覚をどのように持つか、それは記念することによるのです。記念することによって、神の民としての自己確立をするのです。記念するという出来事を中心にあることは、自己認識、自己確認、神の民であることの自覚です。ですから、記念することとは大変大きな出来事になります。80 周年記念と言いますが、何十数年かは別として、記念することによってこの教会が神の教会、神の民であることをそこでまさに自覚する、

神の民として立てられていることを自覚する、それが記念することの中心にある出来事であることを覚えたら良いと思います。

その際に、「記念する」とは具体的に言うと、「礼拝する」ことです。聖にして救いなる神を礼拝すること、それが祭りであり、記念することになるのです。ですから、私どもが礼拝する時に、まさに一つの記念をしている、祭りをしている出来事であることを覚えたら良いのです。イスラエルは過越を祭り、そのことを通して神を賛美することになるのです。出エジプトの出来事は神を賛美するための出来事です。そこで自己を認識し、神を賛美するのです。ですから私どもの礼拝は、神の救いの御業に対する記念としての礼拝であることを覚えたいと思います。

礼拝とはどういうことでしょうか。イスラエルにとっては、エジプトは囚われの大きな力でしたが、囚われの身から私たちを贖い出してくださる、解き放ってくださったことへの応答としての礼拝だということです。記念の中心にあるのは私たちではなく、救いの御業、神の救いの御業がそこにあって、そのことへの応答なのであって、私たちが主なのではありません。私たちは応える者として礼拝するのです。

このことは、自己認識とは自分自身で持てるものではないということを表しています。自己確立というものは、自らの意志や思いによって得るものではないということです。そうではなくて、神の御業によって私どもは自己認識できる、救いの御業によって自己確立できるのです。どうしてかというと、自己認識するとき、罪なる者としての自己認識をすることは非常に難しいからです。残念ながら、自分は罪なる者であるとなると卑屈になりますし、罪なる者として自分自身を受け入れる、愛することは、人間の力や知恵によっては決してできないからです。それができるのは、「赦されてある。神の恵みをいただいてある」という時に、「こんな罪なる者でありながら神の民なのだ」という自己認識が持てるのであって、自分の力によって持てるわけではないのです。ですから、「礼拝する、神の御業を記念する」ということでしか、自己を認識する、確立することはできないことを覚えたいのです。

出エジプトの出来事をイスラエルの人たちは記念しました。記念することによって、救いの神の御業を思い起こす、想起しているのです。そしてそれが、信仰です。信仰というのは、神の御業の想起、思い起こすことです。ですから、礼拝は信仰の業です。まさに礼拝は神の御業を記念して行われるのですから、そのことを常に思い起こすことによって、私どもはそこに信仰を表していると言って良いのです。礼拝はしなくてはならないことではありません。そうではなく、礼拝することで、私どもは神の御業に応え、私どもが贖われ神の民とされているという自己確立をする恵みをいただいているということに他ならないことを覚えて良いかと思います。それが、出エジプトの記念としての過越祭、あるいは礼拝ということです。

★

では、新約ではどうでしょうか。共観福音書のすべてがそうですが、私どもが礼拝を守るのは、主イエス・キリストの復活を記念して守るのです。ユダヤ教の礼拝は土曜日ですから、復活を信じないユダヤ教では復活を記念する礼拝ではありません。新約における礼拝は、まさに主イエス・キリストの主日、週の初めの日の甦りの日を記念して礼拝するのです。私どもは主日ごとに、復活の主イエス・キリストを記念して礼拝しているのです。そのことによってどういうことが分かるかという、罪贖われ、永遠の命を与えられる、神の民としての自覚を与えられるということなのです。「罪を贖われている。そして永久の命を生きる者とされている。まさに神の民とされている」という恵みを自覚する、それが主日の礼拝であることを覚えて良いのです。ですから、礼拝するということは神の民としての自覚を与えられる中心的な出来事です。そこで想起すべきことは、まさに「私どもは、贖われた者としてここにある」ということです。それが主日に覚えるべきことです。そしてそれは信仰の出来事です。罪なる者が贖われ、キリストの甦りの命に与る者としてここにあることを想起する、まさに信仰の出来事としての主日礼拝だということ覚えてほしいのです。

神に属する者としての所在が与えられるのです。出エジプトは、有象無象の奴隷であった、何の力もない、取るに足りない者が、何と神に属する者としての存在を与えられるのです。私どももそうです。本当は、死に服するしかなかったのに、神に属する者としての存在を与えられるのです。それが「記念する」ということのある中心にあること、私どもの業であることを覚えてほしいのです。

何をするか、どんなものの考え方をしているかということではなく、存在に対する神の働きがけなのです。個々の存在には善人も悪人もいますが、どんなに悪かろうと、どんな存在であろうと、なお神はその存在を尊いとおられる。存在に対する恵みの業として、私たちは記念しているのだということ覚えてほしいかと思えます。

★

記念としての祭、礼拝が意味するところがあります。旧約の出エジプトのことで言いますと、神の民イスラエルがここで確立していくのですが、それは何よりも、エジプトの支配からの解放を意味しています。私どものこの世には、様々な力が働いています。イスラエルの民は、奴隷の、まさに無力な民としてこの世の力に服する者しかありませんでした。エジプトの支配が意味するものは束縛です。今日の私どもの世界では、管理ということです。その中で、自分の存在、主権を失っている、それが私どもの現実です。抑圧し束縛する力、支配からの解放、それが礼拝することによってもたらされていることです。エジプトのファラオは、礼拝することを許しませんでした。それはまさに、自分の支配、管理のもとにイスラエルを置こうとしたのです。それは人に存在を与えないし、人に自由を与えることはないのです。

では新約においてはどうでしょうか。それは、罪なるものからの解放です。罪の結果は死であると、コリントの信徒への手紙は語っています。キリストの出来事は命の

贖いであり、永遠の命の出来事とは、死の支配、この世の支配からの解放ということ
です。人を束縛し抑圧する力に対峙し、向き合い、それを超えていくものとしての神
の力を言い表しています。記念する、礼拝することを通して、神の救いの恵みを記念
することを通して、人は自由に生きる喜びを与えられるのです。人に自由を与える、
自由に生きる喜びを与える、それが神の御業なのであり、その神を礼拝するのです。
礼拝によって私どもは、この世の支配のもとに生きるのではなく、この世の支配から
贖い出されて、その抑圧から解き放たれて、神の支配のもとに生きる、そういう恵み
を与えられているのです。

今、この世において一番尊いことは何でしょうか。それは自由です。この自由とか
平等という言葉は、どこから私ども市民のものになったのでしょうか。それは宗教改革
からなったのです。ルターは神のもとでの平等、自由を語りました。それは、教会の
本質的なメッセージでした。「あなたは自由だ。思うことを思い、思うことができる」
ということが自由です。けれども、今の世の中はどうでしょうか。管理の名のもとに
デモもできない、規制しています。そういう意味では、1960、1970年代の方
が自由だったかもしれません。そういう社会の只中に生きながらも、この世の束縛か
ら解き放たれ、神を礼拝し自由を与えられる、自由な者としてそこに立つ、それはま
さしく大いなる恵みの出来事が起こっているということです。

そういう意味で、記念し、礼拝することは、人々が真に求めていることを私どもが
成しているということ、人々が真に求めているからこそ、無くてはならないことであ
ることを覚えて良いかと思えます。この世にありながら、この世の支配に生きるの
ではなく、この世の支配から自由になって神のものとして自分自身を生きることができ
る、そういう恵みが「記念する」ということによってあるのです。まさに「礼拝する」
ことによって、時間や空間、言い知れぬ諸々の力を超えた出来事としての自由を、私
どもは与えられていることを覚えて良いのです。

なぜ自由なのかということですが、自由というのは神にしかありません。神にしか
ないということが大事です。今の政治や世の中は、自由は国やあるいは独裁的な指導
者が持っているのであって、民が持っているという感覚はありません。しかし彼らは
束縛するものであって、決して人を自由にする者ではありません。そしてそういう中
にあって、それらの力に勝る慈しみの出来事を信じることを通して、この世の支配か
ら自由にされる、この世の支配が相対化される。神だけが絶対であり、この世の力が
相対化されるところで、私どもはこの世の力の束縛から自由にされるのです。

「記念する」ことによって、私ども自身の存在を確かにし、存在の大切さをそこに
見るのです。

★

では、愛宕町教会にとっての記念すべきこととは、記念してきたこととは何なのか
ということを考えることが良いと思えます。時代の特徴に合わせながら語ります。

一つは、戦中戦後の愛宕町教会を振り返るということです。ホーリネス教会に属する百石町教会が時代的に何を経験したかということ、国による宗教弾圧を経験しました。教会解散させられました。それから鈴木鶴代牧師は教師籍の剥奪、正確には一応教団が辞任を迫り教師籍を召し上げたのですが、実質的には剥奪したのです。そこで教会は国家権力と対峙させられました。国家権力と対峙しないで存在することは出来ません。国家権力と対峙しない教会は、ある意味で必要とされません。なぜならば、真実な力、権威を主張できなくなるからです。もちろん、自覚的に対峙したわけではありません。国家権力に巻き込まれて、そこで「キリストのみ」と言い表さざるを得なかったのです。そういう意味で、必ずしも勝ったわけではありませんが、そこで向き合うことで、対峙する者たちに「違う」と示すことができ、そこに神の力が働いているのです。

そのことを受けて、鈴木顕栄牧師の時代はどうだったでしょうか。ホーリネスの信仰は、信仰共同体という感覚よりも個人の敬虔な信仰ということが勝る、そういう信仰でした。個人の敬虔な信仰ということが大事だったのです。しかし、戦中の国家による宗教迫害による弊害を見て取った顕栄牧師は、「地域信仰共同体を重んじる」ということを大事にしました。これも、その時代に向き合ったという生き方です。それは単に教団を大事にしたということだけでなく、他教派、エキュメニカルな教会との交わりを大事にしました。その根底にあることは、一人個人で大きな国家権力に対峙するのではなく、神の国の支配を信じる教会が共に手を取り合うことによって、「真実はここにある」ということを示すことができる、そういう戦いをしたのだと思います。そういう意味で、教会が迫害の時代をきちんと覚え、だから戦えということではなく、そういう時代の中で「神の力、神の支配こそが真実な支配である」という信仰に生きる、その恵みを表すことのうちに、またそれを共有していくことの大事さを、顕栄牧師は私どもに示してくれたのだと思います。まさしく真の信仰共同体、主イエス・キリストを信じる教会としての働きがそこに力強く展開されることが、教会の力になることを覚えて良いと思います。

愛宕町教会が1970、80年代に力を持ち得たのは、こういう信仰があったからです。個々人の信仰ということではなく、共に真実に信仰に生きようとする思いがあったからこそ、祝福を得、それなりの働きをしたと言って良いのです。最も問題なのは、信仰を個人の出来事とすることです。個人の信仰は、大いなるこの世の力に勝つことは出来ません。まさに共同体としての信仰が大切であることを覚えて良いのです。

★

そして私の時代には、19年間に9度も土地を買ったりしましたが、何十年の記念として何かをしたということではなく、その時その時、降りかかった火の粉を払っただけでした。ただ、教会は土地を持っていないといけないというポリシーがありました。それがあから、話があった時には買っていきました。しかしそこで大事だ

ったことは、教会が立っていくときに、「御言葉による教会形成」ということを考えたのです。おそらく鈴木先生はそうだったと思いますが、聖書の御言葉を語る牧師ということで私を選んだのだらうと思います。それが実を結んでいったということです。

ルカによる福音書の説教集を出した経緯もすごいことだったと思います。役員会で是非出したいと言った時に、反対したのは私一人でした。御言葉はその場のものなので、文字化したものは駄目だと言ったのですが、その時に信徒たちは、「このルカによる福音書の説き明かしによって、私たちは、自分たちの教会としての信仰を確立できました。だから、教会の記念として出したい」と言いました。それで出すことになりました。そのことが表していることは、まさに御言葉による教会の形成、御言葉によって共同体としての教会を立たしめていくということです。そこに教会の整えがなされていきました。

御言葉による教会の確立、信仰共同体の確立とはどういうことなのかというと、御言葉によって、私どもが神の民であることの宣言が常になされるということです。神の民であることの自覚が与えられること、それが記念することだと先ほど言いました。そうであれば、御言葉によるとはどういうことかということ、御言葉によって、「ここに集まったあなた方は、まさに神の民である」と常に宣言がなされるということ、それが信仰共同体の中核にあることです。

それからもう一つ、私どもはこの世に生きるものとして、自分自身にも囚われています。この世の様々な力の中にある者として、私どももまた、自らの囚われの中に生きています。そういう者に対して、解放をもたらす、自由を与える福音を語るということが中心にあることです。「こうしなければならない」というのは律法ですから、それを語っていたのでは、そこに自由を語ることにはなりません。この世の価値観を引きずっているからこそ倫理的になり、奨励的になると言わざるを得ません。そうではなくて、「あなたは解放されていますよ。まさに神が、罪を贖う者として解放してください」ということが、常に宣言され語られていく、救いをもたらす福音が語られていくのだということを覚えて良いと思います。

ですから、これからの教会は、やはりこのことが大事です。信仰の共同体でなければなりません。信仰共同体として、常に神の民であるという恵みを味わい知ること、常に私どもが神の恵みによって解放されているということを味わい知ること、それがこれからも教会にとって大事なことであることを覚えたいと思います。

★

そのことから、一つのまとめをしますと、人の存在を脅かす、自分自身の存在をも脅かすこの世の一切の力と対峙して、御言葉をもって常に立つこと、これが教会としての大切なことだと思います。この世の力を打ち破れということではなく、この世を救うことなのです。この世を救うためにこそ、自由と解放の恵みをもたらす御言葉をもって、向き合っていることが大事なのです。御言葉は自由をもたらします。

主権とは何か。主権とは自由のことです。わたしがやりたいことができることが主権であり、自由であることが主権の中心にあることです。福音は人間に主権を、自由を与える力です。キリスト主権、神主権、それが十字架と復活の出来事です。そこにこそ、この世からの自由があることを覚えたいと思います。

★

「80周年を迎えるにあたって」、少し言いますと、様々な形で記念の集会を持つことは大事です。そこで、想い起こすことが起こるからです。自覚が生まれるからです。そういう意味では、どんなに小さな集会でも、記念する形での集会がなされることは大事です。主イエスは、「一人二人いるところに、わたしも共にいる、その中心にいる」と言われました。そしてこのことは、各家庭においてもそうです。自らの家族の記念の時を祝う、想起する、そこでそれぞれの存在が確かにされるということ覚えたいと思います。記念することで、大切にすることが起こるのです。記念しなければ、大切にすることは起こりません。記念することは、大切にすることである覚えたいと思います。

どんな集会を持つのかは分かりませんが、どんな集会であっても記念できれば良いと思います。そこに、「私たちはこういう者である」という恵み、自覚、神の御業が覚えられれば、それはどんな集会かということを超えて大切なことだと言って良いと思います。

祈ります。

天の父なる神。記念ということを通して、あなたの御旨を聴きました。記念する、それは「あなたのものである」という自覚を持つことです。そしてあなたが、この私どもに十字架の恵み、復活の恵みをくださっています。あなたのものであり、あなたの支配のもとにある。この世の支配に屈するものであったとしても、なおそれを超えて、あなたのものとしての恵みは揺るぎないことを、どうぞ主日ごとに覚える者とさせてください。愛宕町教会の80周年、日々の歩み、何よりも週毎の礼拝が、あなたの恵みが大いに現されるようになりますように。主イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン

?????

《分団協議のまとめ》

ペトロ分団 鈴木信行

3名参加。

〈講演で教えられたこと〉

* 記念するために祭…イスラエル過越の祭。礼拝＝記念、礼拝を何よりも大事にした。

* 自己認識は、礼拝の場で初めて可能になる。福音は人の存在を脅かすこの世の力から解放し、自由を与えてくれる。

* 毎週の礼拝が記念＝自覚すること。

〈80周年記念事業について〉

* 鶴代牧師時代の振り返り＝次代に伝えるべきことを確認するために、当時を知る中嶋長續兄に話を聞き、記録する。

* 居場所がないと言われている現代の子どもたち。子どもの居場所として教会が何ができるかを検討し、実施する。

* 北紀吉先生のアドバイス

鈴木顕栄牧師は時代を読み、時代を超える働き、それこそが教会の働きと考え、現在の愛宕町教会がある。時代を担う若い人々に伝えるための方法の検討を期待する。

〈まとめ〉

メンバーが3名でちょっと残念でしたが、北牧師、宍戸牧師が短時間加わっていただいたことで多方面から活発な話し合いがなされました。愛宕町教会のこれまでの歩み、神の導きを振り返り、未来に何を残していくのか深く考える恵みの時になりました。

ヤコブ分団 宮澤陽美

4名参加。

〈講演を聞いて〉

記念・過越祭・礼拝すること

〈記念誌について〉

前回60周年から80周年の間の出来事、牧師の交代、コロナ感染症などの記録記事

〈これからどの様な教会を目指すのか？〉

①新しい事業を起こす ②子ども食堂、③年寄りの集い場（風呂屋・囲碁・酒場）、④教育館をキリスト教関連の図書館に（宍戸牧師の蔵書を基に？）、地域にある教会・人が集まる仕掛けを考える

②若い人が興味を持つイベントの企画 ⑤オルガン+メッセージ、⑥各界の著名人を呼ぶ

など色々な意見が出ました。

ヨハネ分団 弓田覚志

4名参加。

〈研修会から〉

記念とは、毎週の礼拝に出席をすること。毎週の礼拝こそ記念。イエス・キリストをこの世に与えてくださり、十字架にかかり、死に勝利して復活して下さったことを覚え、気持ちを週の初め新たにして礼拝に出席することが、「記念」。

〈80周年に向けて〉

* 記念誌の発行＝60周年記念誌を発行してから、この20年間に地上での生活を終えられた教会員の方々の、残っている言葉を載せてほしい。

* 80周年にこだわらず、温泉、老人ホーム、学童、子ども食堂など、地域との交わりができる施設をつくれたらいい。今回購入したオルガンも立派な80周年事業なのではないだろうか。そのオルガンのお披露目演奏会などをしたらどうか。礼拝のオルガニストが得意な曲を演奏しても良い。教会員の高齢化により、ゆくゆくは幼稚園のような送迎バスがあれば、乗る方も、後ろめたさがなく乗って礼拝に出席できるのではないか。施設の事では、礼拝堂の前と後ろにある、電灯の柱の撤去ができるが良い。いずれにしろお金のかかることではあるが、出来ればお金をかけなくてもできる事業なら、尚更良い。でも、80周年事業について、今回のように教会員と語り合えることが幸せなのではないだろうか。

アンデレ分団 渡辺春美

4名参加。

〈講演をお聞きしての感想〉

今回、記念すべき日と題して出エジプト記の過ぎ越しの場面から、イスラエルの民が主の過ぎ越しを記念する祭りを行った、これが礼拝であるとうかがい、大変新鮮であった。私たちが毎週、おささげしている礼拝は、神の御業への応答であり、私たちはその恵みの御業に答えるものなのだ、ということに改めて認識することができた。

又、礼拝は神の御業を記念する祭りだと、うかがった。祭りというと私たちは、どうしても日本の祭りを思い浮かべてしまうが、祭りは礼拝と結びつくのだということも知った。

さらに、個人としての信仰は様々な危険を含んでおり、独善的になってしまうが、信仰共同体としての信仰によって、私たちが神の民であることを自覚することができ、又恵みに答えていくこともできると再確認できた。

〈80周年記念事業について〉

80周年記念と言われると、何かをしなればと、堅苦しく思いがちだが、むしろそこまでの1年、1年、神様のお働きを憶えていくことが大切なのだと思う。80周年記念事業としては、会堂の補修をぜひ行ってほしい。和室をフローリングにしたり、トイレをきれいに改修したり、キッチンの水道の不具合をなおしてほしい。

又、雑談だが、なつかしい昔の青年会のメンバーの話や、最近の孫たちの心配など、様々な話が聞けたことも大変楽しく良かった。

マタイ分団 船木あゆみ

5名参加。

〈講演をお聴きしての感想〉

* 主日礼拝が一番の記念日でとても大事だと思った。大事にすることによって、教会が強くなり個々の力が増し将来に繋がる。

* 記念するとは自覚すること。私たちは愛宕町教会員としての自覚が重要。私たちの教会を改めて覚えることが記念だと気づかされた。

〈80周年事業としてやりたいこと〉

* 80周年に向けて3年をめぐり、主日礼拝をリアルタイムでインターネット動画配信する。スマホで教会の主日礼拝に繋がり、動画を通して共に讃美し御言葉を聴く。現実問題として高齢化も進み、これから教会に来ることが出来ない教会員が増えると思われる。今の時代に即しているのではないか。病床にある方や、仕事で日曜日勤務の方、教会に来るのが困難な方がリアルタイムで礼拝を観られるのには意味があり繋がっている感がある。または、インターネット動画配信をきっかけに愛宕町教会を知ってもらう。例) 北九州の教会で教会員が60名位に対し、ネット参加者が500名位で配信中に献金もする。(冒頭で3年をめぐると言いましたが、提案して下さった方はスマホ初心者でこの事業を立ち上げるのは不可能とのこと。)

* 将来に向けて若い世代を増やす為に、具体的な集会を開き活気づける。家庭においての記念日を祝う。思い出したり振り返ったりして、個々に記念会を持つことで信仰の継承になるのではないか。

* オルガンを新しくしたので記念して、外部からオルガニストを呼んでコンサートを開く。

* 記念事業として、目に見える形で次世代に渡す。(1)床を絨毯からフローリングにする。因みに礼拝堂の緑色の絨毯は鈴木先生が詩編23編のつもりで指定したとのこと(北先生情報)。(2)トイレを改修し、今時のトイレにする。

* 最後に80周年にこだわらず、これからも個々のビジョンを持ちより、長期に渡って意見を言って議論することが大事。

フィリポ分団 古屋律子

3名参加。

〈講演を聞いての感想〉

「記念」の意味について、「記念する」とは、過去のことを記念に残すとか、大勢で大掛かりなことをするという事ばかりではなく、日常の家族の記念日などを記念することも大切なことだと改めて知ったという感想に、皆同感した。

〈「80周年記念事業」としてやりたいこと〉

(1)会堂の建て替えなどの大きな夢を語ることも大切だが、やはりある程度、現実的なことから考えたい。会堂を長持ちさせるために、補修は必要。どれだけの補修が必要かを具体的に挙げ、かかる費用について「記念事業献金」を始めることも必要ではないか。

(2)別館や教育館について、利用されていないのであれば取り壊した方が良いのではないか。ただし教育館については、リフォームして夏期伝実習などに使えるようにしてはどうか。

(3)講演で、記念するために集会を持つことの大切さが語られた。コロナ禍もあり、機会が少なくなった「家庭集会」を復活させてはどうか。高齢化で祈禱会に集えなくな

ったり、またコイノニアでの語り合いの時も、以前のように盛んではない。家庭集会の接待は大変だが、負担をかけず、少人数でもとにかく集まり、共に御言に聞き、語り合う場を持ちたい。

(4)記念誌を発行することは、この20年の記録を残すという意味で大切。

(5)80周年を記念するために、外部講師を招くような集会も開きたい。

?????

讚美歌191番を賛美し、散会。

* 信仰告白

中藤 敏紀

私は薬物依存症者です。

32歳で薬物と出会い、35歳で薬物依存症リハビリ施設のダルクに入所しました。現在54歳になり、入所してから19年の月日が経ちます。

キリスト教との交わりは、ダルクに入所したことがきっかけです。でも、すぐに信仰を持ちたいとは思いませんでした。私は「良い人間だし、変わる必要はない。家族が行けというからダルクに来たけど、ここは自分のいる場所じゃない」、そう思っていました。

私は、良い人間ではありません。昔は自分が良い人間だと思い込み、本当に良い人間を裁きました。再発を繰り返しました。その度、嘘をつき人を傷つけ、家族に尻拭いをさせてきました。そして、そんな自分を愛せなくなっていました。

私には時間と失敗と痛みが必要だったようです。振り返れば、どんなに自分がひどいことをしても、神様は私を孤独にはしませんでした。仲間がいつもそばにいてくれました。あなたの温かさが今はわかります。変わりたい。生き方を変えたい。自分自身が本当に罪人であり、そこから救ってほしいと思いました。ダルクでは、キリスト教と出会います。別人のように生き方が変わっていく人たちを見てきました。自分もそうなりたいと思うようになりました。友人の後押しもあり、キリスト教を宍戸牧師から学んでいます。これからも続けていきます。

長く時間はかかりましたが、神様に導かれ、この日を迎えさせていただいたと思います。イエス・キリストを罪からの救い主として信じ、キリストに従い、共に生きて行こうと思います。

(2024年3月31日 イースター礼拝にて受洗)

* 5年ぶりに

教会バザー(第38回)を開催

バザーを終えて

10月27日礼拝後、2019年以降、感染症の影響のため中止していたバザーを5年ぶりに開催しました。「山梨ダルク支援」「教会土地購入借入金返済」「近隣・英和生への伝道」「教会員相互の交わり」という4つの目標を掲げ、以前のバザーに比べると小さな規模になりましたが、焼きそば・ケーキ等食品・焼き芋・フランクフルト・野菜・喫茶・手芸品・遊休品各コーナーが設置され、山梨ダルク、婦人会、壮年会、CS・青年会それぞれが担当しました。

ダルクの方たちの作る焼きそばは絶品でした。回復の道のりを歩んでいかれるメンバー一人一人に、神様が伴ってくださいますように。互いを思いやる優しさ、強い団結力、真面目で誠実なあり方を尊敬します。

近隣の方たちもおいでくださいました。教会に親しみをもっていただく機会となったのではないのでしょうか。また今回初めて、山梨英和中高YWCAひまわり部のメンバー5名がボランティアとして参加しました。英和生との交わりも感謝です。

バザー委員（雨宮恵子、弓田覚志、弓田仁美、船木あゆみ）各氏の強力なサポート体制と、教会員皆さんの献身的なご奉仕により、無事終えることができました。お仕事の復活を願う声も聞かれました。感謝をもって報告いたします。

（バザー実行委員長 穴戸尚子）

*新しいオルガン奉獻

私たちの感謝と喜びを表す賛美のために

パックスアーレン社製 Digital Computer Organ R-10

61鍵2段手鍵盤（アーレン純正鍵盤仕様）、28ストップ、32鍵小型放射状足鍵盤、サウンドライブラリ5種（Classic Allen、Baroque、French、English、シアター）

愛宕町の旧会堂から現在の会堂で最初の礼拝が行われたのは1982年のことでした。その10年後、1992年には礼拝にふさわしいオルガンを求めてバイカウント社の電子オルガンを導入しました。しかし、導入から25年が経過する頃には故障が目立つようになりました。これを受け、役員会は2017年に「次世代オルガン準備委員会」を発足させ、全オルガニスト、3名の役員、そして牧師夫妻で次世代に受け渡すべきオルガンについて議論を開始しました。

部品交換も限界に達し、修理が困難であるとの見解を受け、まずは礼拝と音楽（賛美）の重要性を再確認するため、2018年には渡辺善忠牧師を招き、「神の楽器としての教会」というテーマで学びの機会を設けました。この学びでは、賛美の基本的な意味、旧約・新約時代の賛美歌の歴史、楽器の発展、役員会や奏楽者、会衆と聖歌隊の役割などを学びました。

その後、具体的なオルガンの選定に関する議論を行い、移動式パイプオルガン、パ

ックスアーレン社の電子オルガン、岡野オルガンが候補に挙がりました。オルガニストの意見から、パイプオルガンは講習を受ける必要があり、価格が高く保守費用もかかるため、電子オルガンに絞り込むことになりました。

2022年には岡野オルガンの製造が中止されたため、2023年に最終的にパックスアーレン社のオルガンR-10を選定し、安中教会でその音を確認の上、導入を決定しました。2024年7月7日、このオルガンが教会堂に設置されました。まだオルガンの持つ良さが十分に発揮されて教会に馴染んだとは言えませんが、今後、愛宕町にふさわしいオルガンとして皆様に親しまれることを願っています。

次世代オルガン準備委員長 清藤城宏

《オルガニストから》

*新しくアーレンオルガンが与えられ感謝です。会衆一同と共に、豊かな讃美をお捧げできるよう、早くオルガンに慣れ、近い将来には足鍵盤が付けられるようにと願っております。 (豊田香織)

*新しいオルガンが与えられ、感謝します。実際弾いてみて、鍵盤のタッチがしっかりしていていいと思っています。せっかく足鍵盤もあるので、できるだけ使えるよう少しずつ練習していきたいです。これまで頑張ってくれた前のオルガンにも感謝です。 (荻野淳子)

*長きに渡り礼拝を支えてくれたオルガンの経年劣化が顕著となり、祈りのうちに新しいオルガンにバトンタッチとなりました。このオルガンが主の栄光を現す道具として大いに用いられるよう、と同時に、未熟な私も旧オルガンのように神様が用いてくださる限り喜びを持って奉仕する者であり続けられるよう、祈りつつ、オルガンと共に奉仕に励みたいと思います。 (弓田仁美)

*旧オルガンに引き続き、新しいオルガンでもご奉仕させていただけますこと、感謝です。少しでもオルガンでの練習を重ねて、礼拝プログラム各々に相応しい音色を見つけられたらと思います。 (古屋律子)

《会衆から》

30年以上に亘って華やかな音色を響かせてくれていたイタリア製オルガン・バイカウントOPERAに代わって、7月14日の主日礼拝よりアメリカ製オルガン・パックスアーレンが穏やかながらも多彩な音色を響かせてれています。

教会のオルガンは、礼拝において礼拝する者が心を落ちつけて神様へ捧げる祈りと讃美を支える大切な同伴者です。オルガニスト夫々の個性ある演奏を受け止めながら、これから、このオルガンが私たちの大切な礼拝を支え続けてくれることを願っています。 (古屋秀樹)

編集後記

教会報“いずみ”は、毎年持たれる全体研修会の記録を残しております。研修会のテーマは、役員会で今年はどうしようかと協議し決めるのですが、その都度、今の、そしてこれからの愛宕町教会にとって何が必要かと考えつつ実施しています。今年には3年後に迎える教会設立80周年をどう迎えるかをテーマに、前任牧師北紀吉先生を迎えて行われました。改めて大事なことに気づかされた会でした。出席した方も参加が叶わなかった方も是非読んでほしいです。そして来年の研修会に繋げましょう。

(清藤城記)